

第140回愛知学院大学 モーニング・セミナー

ロシア革命から100年！ 人はパンだけで生きるものか ～ロシア革命とは何だったのか？～



2017/11/14

中京大学学長
安村仁志



2017年11月14日

はじめに

・今年、1917年に起きたロシア革命から100年にあたります。「ロシア革命」は史上初の社会主義革命で、20世紀の世界に大きな影響を与えた歴史的出来事の一つです。その結果誕生したソビエト社会主義連邦は、第二次世界大戦後資本主義のアメリカと冷戦状態に入り、両陣営の間で繰り広げられた勢力争いは世界に暗い影を与えました。しかし、1991年末にソ連邦は崩壊し、現在新たな国際関係が生まれています。

・では、帝政ロシアでなぜ社会主義革命が起きたのでしょうか？

それは何を目指したものであったのでしょうか？ その実態はどのようなものであったのでしょうか？ なぜその体制は70数年で崩壊したのでしょうか？

・「ロシア革命はなぜ起きたのか？ それは何だったのか」をご一緒に学んでみたいと思います。人間が生きるうえの大きなテーマに通じる《パンか、自由か》に焦点を当てて考えます。

2. ロシア革命について

- 19世紀半ばクリミア戦争に敗れ、「**農奴解放**」など上からの改革を行い、国の資本主義化をはかった
- 急激な工業化で種々の矛盾が生じた
- 国民の圧倒的部分を占める農民は、雇役制度のもと新たな形で地主への従属関係に苦しんだ
- そうした状況でナロードニキらの運動も起こった
- 20世紀にはいると、前世紀末の工業発展に対する反動による**恐慌**に遭遇した

- ・1904年からの日露戦争での旅順陥落は帝政の権威を大きく失墜させた
- ・資本主義の矛盾が露呈し、1905年1月の《血の日曜日事件》を契機に革命運動が高まった
- ・農村での騒乱、都市労働者のストライキなどが広がった
- ・政府は譲歩し、《十月宣言》を發布し、立法議会の召集、言論・集会・結社の自由や約束した
- ・これらの一連の動きを《**第一革命**》という
- ・一時下火になったが、第一次世界大戦勃発し、それが長引くにつれ、国民生活が大きなダメージを受けたため、再び燃え上がっていく

- 1917年2月23日から首都ペトログラードでストライキが始まり、革命が起こってニコライⅡは退位した
- 《**二月革命**》 これで政権を握ったのは、**自由主義的ブルジョアジー**を中心とする**臨時政府**であった
- 亡命先のスイスから戻ったレーニンは、「四月テーゼ」を出し、臨時政府の打倒，ソビエトによる全権力の奪取を呼びかけた
- コルニーロフ将軍の反革命反乱が失敗すると、各地のソビエトが急速に革命化し、10月24～25日(11月6～7日)ボリシェビキが政権を奪取しレーニンを首班とする労農政府が成立した 《**十月革命**》

1897年の国勢調査によるロシア帝国の身分別割合

身分	割合	備考
世襲貴族・一代貴族・官吏	1.5%	官吏や軍人として勤務することにより貴族になる道が開かれていた。 官等表で定められた九等官になった文武官は一代貴族、武官は六等官以上、文官は四等官以上で世襲貴族になれた。
聖職者	0.5%	公認されたキリスト教の聖職者。人頭税、体刑、徴兵免除。
名誉市民	0.3%	ニコライ1世時代の1832年、勃興しつつあったブルジョワジーに与える目的で創設された。人頭税、兵役、体刑免除。

商人	0.2%	1863年全ての身分の者が商人身分になることが認められた。商人と貴族の一部、農民身分出身の資本家がブルジョワジー階層を形成
町人・職人	10.6%	商人身分から分けられた小売商人や零細手工業者であり、都市住民の大部分。帝政終焉時の1917年、2600万人、総人口の15.6%
コサック	2.3%	
農民 都市居住農民を含む	77.1%	・国有地農民、聖界領農民(エカチエリーナ2世時代に国有地化)、御料地(帝室領)農民、領主農民(農奴)に分けられる。1858年調査によれば、農民の55%が国有地農民と御料地農民、45%が農奴(男性10,447,149人)

		<ul style="list-style-type: none"> ・農民には人頭税のほかに領主に対する貢租(生産物、貨幣)と賦役(労役)の義務が課せられていた。 ・工業化の進展とともに都市で出稼ぎ労働者として働くようになったが、身分は農民のまま。農村からの出稼ぎ労働者は工場労働者の主力となり、19世紀末には新たな都市労働者階層を形成。
異族人	6.6%	シベリア、中央アジアそして極東の先住民に対して適用
フィンランド人、外国人・身分不詳・その他	0.9%	

田中陽児, 倉持俊一、和田春樹編『ロシア史〈2〉18～19世紀』、山川出版社〈世界歴史大系〉1994年

十月革命(十一月革命)

- ・1917年9月 レーニン ボリシェヴィキ組織を再建、コルニーロフの反乱を撃破
- ・国民の間に、戦争継続を進めるケレンスキー内閣に対する不満が強まり、ボリシェヴィキ支持が増大
- ・レーニン 武装蜂起を決意 ⇒ 10月24日ボリシェヴィキが臨時政府の拠点(冬宮)襲撃
⇒ ケレンスキー逃亡 ⇒ 臨時政府崩壊
- ・翌25日 全ロシア=ソヴェート会議開催、26日「平和についての布告」と「土地についての布告」発表 新政府発足

- 10月28日法令で、身分制度廃止、古い司法制度廃止、銀行の国有化、結婚の自由、男女同権などの一連の改革実施
- 反革命との戦いのなかで、チェカ(非常委員会)=反革運動の取締機関 設置 ⇒ 1922年ГПУ
- 1918年1月 憲法制定議会在が招集されたが、ボリシェヴィキは多数を占めることができなかった
⇒ レーニン 議会制民主主義をブルジョワ権力の擬制であるとし、実力で憲法制定議会在を解散、ソヴェートを最高機関とする労働者・兵士の政権を樹立
- ボリシェヴィキ以外の党派追放、ボリシェヴィキ独裁(プロレタリア独裁)体制に
ロシア社会民主労働党ボリシェビキ派(ロシア共産党)

スターリン (1878-1953)

- ・十月革命に加わり、ソヴェート連邦政府およびソヴェート連邦共産党の成立に深く関与
- ・レーニンの死後 トロツキーとの後継者争いを制し、自身が務めていたソヴェート連邦共産党中央委員会書記長に権限を集中させることで後継者としての地位を確立
- ・一国社会主義論による国内体制の維持を優先する路線
- ・1928年 干渉戦争への対応においてとられた戦時共産主義体制による経済疲弊を克服すべく、一時的に導入された新経済政策(ネップ)を切り上げ、**第一次五ヶ年計画**の実施
- ・**農業の集団化(コルホーズ)**を進めて合理化と統制を進め、脆弱な工業力を強化すべく工業重点化政策を推進
- ・急速な経済構造の改革 飢饉もあり、国民に犠牲を強いた
 - ⇒ 反発も
 - ⇒ 反対派に対する厳しい弾圧を実施 粛清
収容所への収監 シベリア追放

ロシア革命とは何であったのか

- ・短期間に一挙に、国家体制が帝政から社会主義に突き進んだ
- ・マルクスの理論(資本主義社会の矛盾が必然的に社会主義を導く)とは異なる道のり
- ・遅れたロシア社会が資本主義社会の成熟を経ずに社会主義化
- ・戦争を終結させた
- ・農民と労働者を解放した
- ・**パンを保証した**
- ・議会政治や市民的自由はブルジョア的なものとして排除された **自由の束縛**
- ・**プロレタリア独裁** **官僚性の肥大化・硬直化**
 スターリン独裁 **個人崇拜**

パンか自由か

1.人は《パンだけで生きるものではない》存在？

- ・究極的テーマ

人はパンがなければ生きられない

パンさえあれば生きていると言えるのか

- ・衣食の保証で満足できるか

衣食の不足＝貧窮 からの脱却 ⇒ 安心、安全

- ・「衣食足りて礼節を知る」ともいうが

- ・欲望は抑えきれるか 《もう少し》《もっと》

トルストイ『人にはたくさんの土地が必要か』

パンか自由か (2)

・パンが保証されると、、、

働かなくなる？ 生きる目的は？

2. 人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである

マタイ4:4

- ・パンの必要性を否定するものではない
- ・内的充実を必要とする
- ・ホモ・レリジオス

ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

パンか自由か (3)

3.自由の問題

・自由とは

何をしてしても許される状態のことか？ No

「自ら」に「由る」 自分でよく考えて決断する

他人の束縛を受けない

他者の意志にではなく、自己自身の意志に
従って行為する

一定の労力と責任を伴う

「播いた種は刈らねばならない」

パンか自由か (4)

- **自由の重荷**
- 自由人たる尊厳にふさわしい巨大な責任 (ベルジャーエフ 自由—『ドストエフスキーの世界観』)
- **ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』**
第五編第五章の「大審問官」のテーマ
- マタイ伝第4章 キリストが荒れ野でサタンから三つの試みを受ける場面をテーマにしている

パンか自由か (5)

- ホモ・レリジオス

ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と
資本主義の精神』

パンか自由か (6)

人間は、

基本的には、他人に束縛されたくない、自由に生きたい、と願っている

しかし、何でもかんでも「自ら」に「由って」、自分で考え判断し、行為することは大変なことだと感じている

時に、自由を投げ出したいとも思う

パンか自由か (7)

ロシア革命によってもたらされた体制

- ・パンの保証と自由の束縛の状態になった
- ・食糧 社会保障(医療、学校、年金)
- ・計画経済 ノルマ
- ・自主性の欠如 労働意欲の低下
⇒ 生産力

大審問官のことば

「人間の良心を支配し、パンを手中に握る者でなくして、いったいだれが人間を支配できよう。」

「パンさえ与えれば、人間はひれ伏すのだ。なぜなら、パンより明白なものはないからな。」

ペレストロイカを振り返る

перестройка

< пере(=reもう一度) + стройка

< строить(建てる)

reconstruction restructure

ロシア革命70周年(1987年)軍事パレード時の
スローガン

Демократия 民主主義, Мир 平和,

Перестройка ペレストロイカ, Ускорение 加
速化

ペレストロイカを振り返る (2)

- ・時の共産党書記長**ミハイル・ゴルバチョフ**(1985年就任)

硬直し、停滞している政府・社会を建て直そうと
した。

但し、基本的には社会主義体制の枠内での改革を志
向 穏健な経済改革

同時に、チェルノブイリ原発事故後、政治改革にも着
手 風通しの良い社会 **グラスノスチ**

- ・これに対し、不十分だとする**エリツィン**などの急進派、
危機感を持つ保守派党幹部、軍上層部の双方から批
判や反対がおこった。

ペレストロイカを振り返る (3)

- 下からの改革運動も起こり始めた。
 - 1989年3月 初めて複数立候補制によって人民代議員選挙 → 5月第1回人民代議員大会開催
 - 1990年 共産党一党支配の否定、大統領制の導入
 - **ゴルバチョフ 初代ソ連大統領に**
- しかし、経済改革が中途半端：計画経済の完全廃止には至らず 市場経済の導入も一部にとどまった
 - 混乱 → 物不足からインフレ進行
- 外交政策では《**新思考外交**》が掲げられた
 - 東欧諸国への統制停止 → 東欧諸国が一気に社会主義を放棄する東欧革命
 - 国内的にも、バルト三国などが分離独立運動を起こす

ペレストロイカを振り返る (4)

- 1991年8月 危機感を募らせた保守派クーデターがゴルバチョフを監禁
共産党の指導性と連邦制の維持を図ったモスクワ市民が立ち上がってクーデターに反対 → あっけなくクーデターは失敗
- 1991年12月25日 ソ連邦崩壊

ペレストロイカを振り返る (5)

★民主化という《自由》は手に入ったが、中途半端な経済政策の結果、豊かな《パン》にはつながらず、
民衆の満足は得られず、社会不安をきたし、
体制の崩壊となった。